月報
岡崎の教育

平成16年1月1日
1月号
発行・編集
岡崎市教育委員会

今月の紙面

教育随想 …… 1
岡崎西高等学校長　黒柳　啓司氏
この人に聞く …… 2
中部バードカービング協会理事　市川　誠氏
羅針盤 …… 2
社会科指導員　杉田　吉男
ふれあい …… 3
城南小　森田　淳一
梅園幼　杉浦　綾子
特集 …… 4
書の文化　薫る学び舎
お知らせ …… 6
フォト・ヒストリー …… 8
小中合同運動会（昭和35年）
この本を …… 8

教育随想

子どものヤル気を引き出す

岡崎西高等学校長
黒柳　啓司　氏

勉強・部活動をはじめどのような分野でも何かの上達を目指そうとするとき、自らヤル気になって取り組む場合と、そうでない場合とでは成果に大きな差が生じることは万人の認めるところである。教師として、あるいは親として、子供にヤル気の大切さを説くことはさほど難しいことではない。しかし、その気持ちを実際に引き出すことは容易でないとつくづく感じている。

子供のヤル気を引き出す具体例として、数年前に新聞の投稿欄で「おやじ越え」という言葉を目にしたことがある。身長、走力、遠投力、跳力、腕相撲、漢字テストなど何でもよい。おやじを越すことを当面の目標にさせて子供に頑張らせているという父親の手記であった。これは面白い試みであり、いろんな発想のヒントになると思う。

次に、「好きな言葉」を持たせることを勧めたい。疲れて気持ちが消極的になった時に、自分を奮い立たせてくれる言葉なら何でもよい。私の座右の銘は「成せば成る」で、亡き父親から譲り受けたものである。

もうひとつ私自身が大切にしてきた思いがある。これまで教員として、確かな目的意識を持たせる、誉める、叱る、競争させる等々、さまざまな方法で実践してきたが、常に念頭にあったのは、子供との良好な人間関係の形式であった。「あの人の言うことなら」と思わせることが子供の心の琴線に触れる第一歩と信じているからである。

いずれにしても、これらはあくまで例であり、すべての人に効果的な方法などは存在しない。結局、個々の子供に適した方法を探り出し、地道に努力していくしかないのかもしれない。

（くろやなぎ　けいじ）

この人に聞く

ふるさとシリーズ

木を削る

中部バードカービング協会理事
市川　誠　氏

モズが枝の先で遠くを見ている。今にも動き出しそうだ。でも、これは市川さんが作った作品なのである。首の曲げ方、羽根の微妙な色の変化等、本物の鳥と見分けがつかない。作るのにかかった時間は、延べ約六十時間だそうだ。

市川さんは、五年前にアメリカで行われたバードカービング世界大会に「ブルーバード」という作品を出品し、第三位に入賞している。

バードカービングにのめりこむようになったきっかけをお聞きした。

「仕事があまりに忙しくて、うつに近い状態になりました。そんなとき、オオルリの姿を見かけました。以前よりバードカービングのことは知っていましたが、その姿を見て、自分で作ってみたいと思ったのです。無心になって木を削ることで、気持ちが落ち着いてきました。」

子供のころから手先が器用で、今は自動車の新しいモデルを木型で作る仕事をされている市川さんも、最初はかなり苦労をされたようである。

「簡単だと思って自分流で作ってみるのですが、何かおかしいのです。そこで、バードカービングをやっている友人に師匠を紹介してもらい、教えてもらったのですが、実に奥が深いのです。脚の関節や筋肉のつき方、食べるものによって違うくちばしの形など、鳥のことに詳しくないと、いくら作っても自然な姿にはならないのです。」

今では、カルチャーセンターや学校等で指導もされる市川さんに、最近の子供たちの様子についてお聞きした。

「私の子供のころは、ナイフで木を削って、船や飛行機を作ったものです。もちろんよく手を切りました。でも、その経験から、木には逆目があることや手を切ったときの痛みを覚えました。最近の子供には、こうした経験が欠けていますね。テレビゲームばかりで、本当に自分の手を切った経験がないから、簡単に人を切りつけたりしてしまうのだと思います。危ないからと言って、子供からナイフを遠ざけるのではなく、実際にナイフを使って木を削り、手にけがをしながら学んでいく、本物の経験が大切なのではないでしょうか。」

市川さんの言葉を聞き、体験活動の価値を改めて教えていただいたような気がした。

（氏　名　いちかわ　まこと
生年月日　昭和三十二年十月二十三日
住　所　奥山田町字洞二六―二）

子供が満足感を味わえる話し合い活動

社会科指導員　**杉田　吉男**

「先生だけ牛乳飲んでずるい。」

A小学校三年生のスーパーマーケットを教材化した授業は、先生が牛乳を飲むシーンから始まった。そして、学級でスーパーマーケットを見学したときに牛乳が置いてあった場所を確認した後、学習課題「なぜ牛乳はそこにおかれていたのか」が提示された。

B先生の歯切れのよい絶妙なペースで、学習課題についての話し合い活動へと授業が進んでいく。

「チーズやヨーグルトなど、牛乳から作るものの近くにある。」

「見つけやすい所に置いてある。」

「エンド（陳列棚の一番端）には買ってほしいものが置いてある。」

見学で調べたことをもとに意見が出される。一通り意見が出つくし、話し合いが途切れかけたところで、

お年寄り訪問から学ぶ

城南小　森田　淳一

「年をとると体が不自由でつらいから、年はとりたくないな。」

老人福祉施設での交流後、A男はわたしにふとつぶやいた。

交流後の話し合いで、地域のお年寄りの生活も調べてみたいという意見が出され、街でインタビューすることになった。恥ずかしがりのA男も恐る恐る話しかけていた。地域の方々は笑顔で応えてくださった。

「話していたら、Bさんが交流してもいいって言ってくれたよ」と、声を弾ませてわたしに話してきた。

「交流のなかで、きっといいものが見つかるよ」と、励ました。

A男たちが交流を始めたBさんは、伝統工芸士であった。職人としての自信と誇りを持ち、長年仕事に打ち込んできたBさんの姿やお話から、A男たちはお年寄りの人たちの生き方や生きがいを学ぶことができた。

「うちのじいちゃんは体が不自由だけど、元気いっぱいだし、輝きはBさんと同じだ。」

交流の報告会でこう感想を語ったA男の目は、自信にあふれていた。これからのA男の前向きな活動に期待している。

先生見てて

梅園幼　杉浦　綾子

「先生、鉄棒見てて」と、弾んだ三歳児A子の声。小柄な体がふわっと上がり、前回りをして着地。「すごいね」と、頭をなでた。

「わたし、もう大きくなったもん。」

入園当初のA子は、誘いかけに応じず、硬い表情でわたしや周りの子がしていることをじっと見ているだけだった。A子が意欲的に活動できるようにするには、園が安心して過ごせる場となり、心が開放されることが大切であると考えた。

手をつないで行動を共にしたり抱いたり、排泄や食事など、生活面の細部にも手助けをした。すると、困ったときには頼ってくるようになったので、「自分でできることはやってみよう」と、励ましたりほめたりして、少しずつ手を離すようにした。

運動会では、種目であった平均台を、一旦は足が止まったものの、教師が差し出した手を振り払って、自分で渡り切った。A子は、その日をきっかけにして、友達がしていることを一緒にするようになってきた。

自分で動き出せるようになるまでには時間がかかるが、ゆっくり気持ちをほぐし、チャンスをとらえて指導することの大切さを、改めてA子がわたしに教えてくれた。

「先生だったら店の奥の方じゃなくて、目立つように店の入り口近くに置くけれど、みんなはどう思う」と、B先生は子供たちに問いかけた。

「入り口に近いと温かくなる。」

「冷やさないといけないものは集めて置いたほうがいい。」

「売れる牛乳を奥の方に置いて、お客さんが奥まで来るようにする。」

再び活発に意見が交換され始めた。授業の最後に、ビデオでスーパーマーケットの店長さんの話を聞いた。すると、子供たちが考えたことがほとんど出てきた。このときの子供たちの満足そうな顔が印象的であった。

このような子供の姿が見られた要因として、次のことが考えられる。

① 導入での活動を通して、子供の問題意識を高めることができた。

② 本時の学習課題が明確であった。

③ 話し合いを深めるための教師の適切な支援（発問）があった。

この授業で取り上げられていたのは「牛乳の置き場所」だけであったが、そこからスーパーマーケットの努力や工夫を多面的に、そして実感的にとらえるところまで学びを深めることができていた。子供たちの社会認識の深まりを感じることができた授業であった。

書の文化　薫る学び舎

▲ 総合的な学習「書で表現する人生のこれまで、これから」（矢作中）

市内の小中学校には、著名な書家の作品が数多くあり、学校環境を豊かにしている。特に浅田蓬村先生（故人）や現在活躍中の神谷葵水先生の作品を目にする機会は少なくない。その迫力ある筆の運びや微妙な墨の濃淡、個性あふれる字体は、時代（とき）を越えて今なお学び舎に文化の薫りを漂わせている。

書くことは自分の思いを伝えたり、自分を表現したりするために欠かせない活動である。現指導要領では、毛筆・硬筆を問わず、書くことにいそしむ場は以前よりも減っている。そんな中にも、矯正器具を使って低学年に正しい鉛筆の持ち方や姿勢を指導したり、講師の先生を招いて自分の生き方を筆で表す場を設定したりして、工夫しながら書の指導を進めている学校がある。

毎年一月に開催される岡崎市小・中学校書きぞめ展では、子供たちの書写代表作品を鑑賞できる。書きぞめ展の歴史は古く、当初は城北会館（昭和三十三年より）で開かれていた。昭和四十七年度からは新設された岡崎市美術館に場所を移して（改装工事のため連尺小学校で開かれた平成五年度を除く）開催され、今年度で四十七回を数える。

「文化の時代」「心の時代」と言われる二十一世紀。社会が複雑に変化している時代ゆえに、子供の情操豊かな人間性や教養・個性を高めていく必要があろう。「自分の字を書くことは自分らしく生きること」と、ある書家は言う。書写力の低下が危惧される今、書くことの大切さをもう一度見直したい。

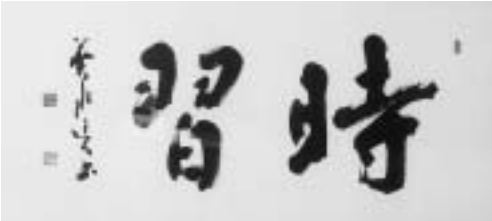
▲ 自作の書き方練習帳を使った書き方指導
（昭和56年度・竜谷小）

▲ 第46回岡崎市小・中学校書きぞめ展会場での表彰式
（岡崎市美術館）

▲「恵」（甲山中）
戸田　提山（大正6年～）
独立書人団会長・日展役員（参与）
毎日書道会最高顧問
平成元年日展内閣総理大臣賞受賞

▲ 舞台を使った試書作品の紹介（矢作東小）

「啐啄（そったく）同機」（生平小）　▶
浅田　蓬村（明治36年～昭和59年）
昭和24年から連続7回日展入選
2度の紺綬褒章授章／愛知県より文化功労者として表彰



▲「時習」（山中小）
神谷　葵水（大正5年～）
愛知教育大学名誉教授／全国教育書道展・審査長
勲三等旭日中綬章授章
昭和25年から10回連続日展入選

▲ よい姿勢を意識させる
ペンダントの活用（井田小）

▲「桃李満天下」（竜南中）
賈才（かさい）　元フフホト市長・書家／昭和61年訪日・第1回交流使節団団長

▲ 矯正器具を使った正しい
鉛筆の持ち方指導
（岩津小）

各校に残る主な書家作品（アンケートより抜粋）

浅田　蓬村	「梅小移山」（梅園小）　「鵬飛」（岡崎小） 「移山」「射石為虎」「啐啄同機」（生平小） 「継続は力なり」（秦梨小）　「堅忍不抜」（細川小） 「忍」（葵中）　「龍」「虎」（河合中）
神谷　葵水	「聴無聲」「拙」「山雲海月情」（愛宕小）　「時習」（山中小） 「豊かな情操逞しい創造力」「恵」（甲山中）
賈才	「生愛師尊」（奥殿小）　「勁松」（大門小） 「敦品励学」「尊師愛生」（北　中）　「桃李満天下」（竜南中）
鈴木　紫龍	「質実剛健」（甲山中）　「歩みたしかに」（六ッ美中） 「愚公移山」「創造」（新香山中）
杉原　丘南	「徳知体」（三島小）
小嶋　和晃	「真実一路」（羽根小）
戸松　秀月	「寿」（美合小）
彦坂　江泉	「野」（福岡中）
角谷　玉雲	「萌動」（山中小）　「少年よ大志を抱け」（東海中）

▲ 国際交流学生との書写の授業（美川中）

● 教育最新情報

○不登校への対応について

平成十五年六月に、文部科学省より「不登校の対応について」のパンフレットが配布され、次の視点が示された。

・不登校の解決の目標は、子供の将来的な「社会的自立」と捉(とら)え、「心の問題」のみならず「進路の問題」であるという認識に立つこと。

・適切な支援と多様な学習の場を提供するために、学校、地域、家庭で密接な連携をとるとともに、教育行政機関や民間施設等との連携、協力が必要であること。

さらに、この中で不登校とならない魅力ある学校づくりとして、学校と社会のつながりを強めた「開かれた学校づくり」が強調され、

・「心の居場所」「絆(きずな)づくり」の場としての学校

・安心して通うことができる学校の実現

・発達段階に応じたきめ細かい配慮

・学ぶ意欲を育む指導の充実

・習熟度別の指導や基礎学力の定着に向けたきめ細かい教科指導の実施

・学級活動、児童会・生徒会活動、学校行事等の特別活動の充実

などの視点が指摘された。

岡崎市の新たな取組

こうした文部科学省の方針のもと、岡崎市でも新たな取組を発足させている。

〈臨床心理士と医師との連携〉

この取組は、公衆衛生センターに臨床心理士を派遣し、病気による不登校児童生徒の治療ができるようにしたものである。これにより学校巡回などを通して、児童生徒に公衆衛生センターでのカウンセリングを紹介できるようになった。医師と臨床心理士の連携による対応を始めたところ、その結果、児童生徒の不登校が着実に改善されている。

〈SSN事業〉

SSN事業とは、広域で協調体制を確立し、岡崎市・幸田町・額田町がネットワークを組んで不登校対策に臨む事業である。

今年度は、年間六回のケース会議（講師　角田春高氏）、保護者への講演会（講師　杉浦壽康氏）、教員の資質向上を図る講演会（講師　角田春高氏）を実施している。

一市二町が積極的に事業に参加し、不登校児童生徒の解消に向け取り組んでいる。

▲ 保護者への不登校対策講演

● 海外研修報告

矢作東小　大西　裕子

第二回岡崎市教員海外研修として、三人でフィンランドを訪問した。「読解力世界トップの背景を探る」「フィンランドの誇るＩＣＴ教育とは」「学校教育を取り巻く諸問題について」など、各自が研修テーマを持っての出発であった。

読解力世界トップの背景

一年生から本に親しませ、高学年になるに従い自分から本を選んで読めるようにと、小・中九年間を見通した読書計画があった。それを教師集団が独自に作っている。左に基本文型、右に文学作品を取り入れた教科書を使い、自分はどう思うかというディスカッションを授業に取り入れ、読解力を育てる工夫がなされていた。読みたい本が学級人数単位で大量に届いたり、市の職員が読書指導に協力してくれたり、市の図書館との連携システムも整っていた。

ＩＣＴ教育について

どの学校でも、様々な教科で子供がパソコンを使いこなしていた。共通しているのは、メディアの利用は手段であって目標ではないという考えである。教員の研修制度も充実しており、教師は子供の学習を支える立場を徹底していた。

学校教育の諸問題

分からないと訴える子供への対応システムが充実しているのに驚いた。特別クラスを設けたり、市へ要請して教員を派遣してもらったり、子供の学ぶ権利を大人が保障するのは当然という考え方が印象的であった。また、どの学校でも「生活態度は厳しくみます」という言葉に、学校の役割が明確であることを感じた。「百聞は一見に如かず」を実感した有意義な研修であった。

●第三十一回教育文化賞授賞式

▲ 教育文化賞授賞式（期日：11月15日　於：せきれいホール）

「教育文化賞」は、岡崎市の教育文化振興に寄与する個人または団体の優れた業績や、現に続けている研究・活動に対し、顕彰・助成を行う目的で実施している。

今年推薦された個人・団体も、長年の地道な努力の積み重ねによる成果が顕著であった。推薦の数は総計三十八点で、広い視野の中で新たな活動に目が向けられていた。

式典終了後、過去の受賞団体による記念公演が行われた。

（個人の部）

◆竹内　清　氏

昭和六十年の開設から、ハートピア岡崎運営審議会長を、さらに平成二年からは「岡崎市いじめ不登校対策協議会」の会長を務め、市の不登校児の減少に大いに寄与している。

◆鶴田　秋夫　氏

昭和六十二年から、交通安全活動を中心に地元幼稚園や小学校への支援活動を継続し、園児や児童の交通安全意識の高揚や豊かな心の育成に大いに貢献している。

（団体の部）

◆現職教育委員会
算数・数学部統計委員会

昭和五十一年より「岡崎市児童・生徒統計グラフコンクール」を企画・実施し、子供たちの情報活用能力の向上に寄与している。

◆矢作西小学校　緑化推進部

昭和四十八年より環境緑化推進活動に取り組んでいる。活動を通して、地域の教育力を高め、自然や命を大切にする子供が増えている。

◆福岡小学校

昭和四十五年から児童詩教育に取り組み、全校詩集等を毎年発行している。こうした教育活動を通して、児童の感性や表現力を高めている。

▲ 受賞された諸氏〔鶴田、竹内、算数・数学部、矢作西小、福岡小〕

◎過去の受賞団体による記念公演

▲ 第14回受賞
〈岡崎スクールバンド協議会〉
代表校　竜海中学校

▲ 第13回受賞
〈竜楽社〉

▼ 第16回受賞
〈岡崎市民合唱団〉

●表　彰

◆全日本自作視聴覚教材コンクール

・優秀賞

「二七市―市を支える人々―」
鈴木（竜海中）　大塚（福岡中）
川本（小豆坂小）　松下（矢作東小）
早川（六ッ美中）　河合（南中）
尾藤（北野小）

・入選

「岡崎にも海があった―縄文海進―」
寺澤（竜海中）　山口（常磐東小）
清水（矢作北中）　吾妻（矢作南小）
杉本（前梅園小）　津田（六ッ美中）

・入選

「養鶏農家の努力―安くておいしい玉子作りのために―」
小境（矢作中）　岡戸（前山中小）
福岡（美合小）　倉地（連尺小）
広瀬（根石小）　松原（六美中部）

◆第九回東海ユースフットサル大会

・東海大会優勝　福　岡　中

◆愛知県少年消防クラブ員防火作品

・全国少年消防クラブ運営指導協議会県支部局長賞
大樹寺小　林　完治

◆フードメッセ・イン岡崎「小中学生料理コンテスト」

・市長賞　新香山中　南條・清水

◆第二十二回「海とさかな」作品コンクール

・農林水産大臣賞　連尺小　鈴木俊哉

◆岡崎市防火ポスター・習字

市長賞のみ

・ポスターの部
大　門　小　鈴木　優太
大樹寺小　林　完治
甲　山　中　大須賀　碧

・習字の部
六ッ美北部小　原　幸乃
細　川　小　田中　麻友
葵　中　高橋　遼至

◆第二十二回全日本小学校バンドフェスティバル

グッドサウンド賞　竜　美　丘　小

◆愛知県中学校駅伝大会

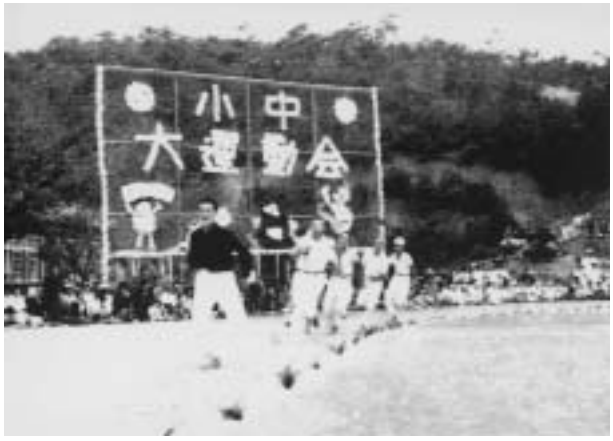
・女子優勝　六ッ美中
七位　竜　南　中

・男子三位　美　川　中
四位　東　海　中
五位　城　北　中
七位　北　中

小中合同運動会

（昭和35年）

写真提供：岩津中学校



旧岩津中学校校舎が、現岩津小学校地内に建てられていた当時は、小中が運動場をともに使っており、施設面でも苦しい時代であった。写真は、昭和三十五年、小中合同で開かれた運動会の様子である。こうした形は、発足時から昭和三十七年まで行われたという。

今日、小中交流や連携が求められている。小中がともに活動することで得られるものを大切にしたい。

・カット　南中　中根勅子

オアシス

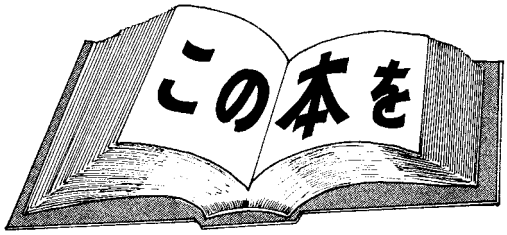
「オブザーバー」は、「陪審員」「監視員」と言い換えるとの提案が、昨年末、国立国語研究所からあった。他にも多くの外来語の言い換えが提案されている。最近の教科書には、「パネラー」「ブックトーク」などが普通に使われている。言葉の指導を今一度考える必要がある。

新春を彩る鉢物が、庭先に飾られている。その中に「千両」や「万両」「万年青（おもと）」など、昔から縁起の良い植物として親しまれてきたものも並べられている。寒い時期ではあるが、青々とした葉や赤い実を見ると、不思議と新しい年への新たな気持ちが湧（わ）いてくる。

あらん限りの力をふり絞って、ラストの走りに入る。夕暮れの運動場を黙々と練習に励む駅伝部の選手たち。年明けを迎え、練習にも熱が入る。一月は、岡崎市民駅伝の季節でもある。熱き思いを託した一本の襷（たすき）が引き継がれ、各チームが感動の走りを見せてくれることだろう。

墨の濃淡、にじみ方、かすれ具合で表現が幾通りにも分かれる書の魅力。まるで書いた人の生き方まで伝わるような迫力さえ感じる。筆を思い通りに動かすことができたらどんなに素敵だろうか。

一念発起、今年は、自分の筆記具の中にぜひ筆を加えてみたい。



＊本気の教育でなければ子どもは変わらない　原田　隆史
旺文社　￥1600

＊行儀よくしろ　清水　義範
ちくま新書　￥680

＊武蔵とイチロー　高岡　英夫
小学館文庫　￥495

＊浮世道場　群　ようこ
講談社　￥1300

＊九一歳の人生論　日野原重明・瀬島龍三
扶桑社　￥1400

本書は，両氏の対談をまとめたものである。年齢は共に91歳（対談当時）。それぞれの人生は茨（いばら）の道であったが，かくしゃくたる老紳士たちから紡ぎ出される言葉に刺（とげ）はない。穏やかな言い回しであるが意味は深く，一言一言が心に響いてくる。

「環境の中で，懸命に生きようとすることが本文をもって生きること」という一文は，自分をさておいて，つい愚痴っぽくなる生きざまに，「与えられた状況の中で，精一杯努力せよ」と，喝をいただいた。